



校長室だより

校長 山崎 聡子

絵本の豊かさ

先日、講演会で、絵本の素晴らしさについてお話を伺いました。その中で、ラーメン事件という話がありました。講演をしてくださった方は、社会の中で困っている立場にある方々を支える働きをしておられる方なのですが、ボランティア活動と一緒に協力してくれた子供たちに、夕飯の御馳走をすることにしたとのこと。その際、皆がステーキやプリン、アイス等のデザートを注文する中「わたしはラーメン」という子がいたとのこと。お母様はせっかく声をかけていただいたのだから、もっといいものをたのんだらどうかと促したそうです。でも「わたしラーメンが好きなのに、ラーメン食べてはダメなの？」という言葉が返ってきたとのこと。このエピソードは、社会の価値観、多数が選ぶ基準で物事を捉えていくのではなく、子供の求めている価値や考え、思いは何かに視点をおいていくことが大切なことであることについて示唆しているものであると思いました。つまり「みんなは、こうしているよ」ではなく「あなたは、どうしたいのか」と問う姿勢が大切なことであること、自己決定させていくことの必要性について、子供の事実から考えさせられるものでした。

講演の中で、絵本というのは、こういった、事の本質を子供の世界の中で問う素晴らしい本なのだということを教えていただきました。いくつか絵本を紹介していただきましたが一番心に残った絵本のあらすじを紹介したいと思います。

もぐらのモール君は巣から落ちたひな鳥を見つけ飼うことにしました。友達は餌を探してくれ、ママは餌の与え方を教えてくれました。モール君は、大きくなったひな鳥を自分のペットにしようと思いますが、野生の小鳥なので羽ばたこうとします。そこでモール君は小鳥が飛んでいかないように木の板で丈夫な鳥かごを作りました。小鳥もママも悲しくなりました。でも、モール君は「あいしているんだもん」と言って小鳥を自由にしてあげません。そこに、おじいちゃんがやって来て、モール君を高い丘のてっぺんに連れて行きます。そのとき、突風により飛ばされそうになったモール君は自分が飛んだように感じます。家に帰ったモール君は、閉じ込めていた小鳥を鳥かごから出し、空に放してあげます。「だって、あいしているんだもん」

『あいしているから』

マージョリー・ニューマン作 評論社

自己中心的な愛から、他者に視点をおいた愛へ変化していくすてきな絵本でした。自分自身が何らかの体験をすることで、物事の見方が180度変化していく話でしたが実はそれは、平凡に見える日常生活の中に恵みがたくさんあり、そのことに自分で気付いていく中で心のありようが変化するのではないかと、この絵本から私はそのように感じました。

大人の絵本運動を行っている柳田邦夫は「絵本は一生に3回読む」と発信しているそうです。冬休みに、子供たちと共にすてきな絵本に出会えるといいなあと思います